

子育てサークルは地域のソーシャル・キャピタルを豊かにするのか

—子育てサークルOB 対象の質問紙調査をもとに—

藤本 明美

キーワード：子育てサークル、ソーシャル・キャピタル、エンパワメント、地域

1. はじめに

1970年以降、子育て家庭を取り巻く環境の変化によって育児不安や、児童虐待をはじめ、子育てに関わる様々な問題がクローズアップされてきた。その要因として、社会全体の子育て力の低下、地域社会における人間関係の希薄さやコミュニケーション能力の低下、出会いの場の減少などが指摘されている。政府が少子化対策として子育て支援政策を打ち出してきたのは1990年の「1.57ショック」が契機であった。しかし、当初の在宅家庭への支援は保育所の整備のために後回しにされていた。そこで、待ったなしの状況の中、子育て中の母親たちが自ら孤立した状況を打破しようと、子育てサークルという自主的な親子の交流の場を全国各地で立ち上げ始めた。地域の施設を借り、自宅を開放して場所を確保し、チラシを近隣の親子に配布して「一緒に子育てをしよう」と呼びかけた。子育て中の仲間と出会い支え合える場が自然発生的に瞬く間に全国へと一気に広まった。

子育ての第一義的な責任は親や家族にあると喧伝されるが、子育ては家族だけでなく、大昔から地域（村）全体で行われ、受け継がれてきた。地域社会の支え合いがあって初めて親や家族が子育ての第一義的責任を果たし得る。親たちが自主的に出会いの場をつくり、仲間とつながり、子育てを支え合える関係性を築こうとする行動は、まさに本来的な子育て支援の希望の灯であったと言われる。

1980年代後半から2000年代初めにかけて、日本全国で子育ての当事者同士が支え合う「子育てサークル」が自主的に運営され、最盛期を迎えていた。筆者も1995年に子育てサークルを立ち上げ、子育て仲間に助けられてきた。1997年に「京都子育てネットワーク」を設立し、地域のインフラとなっていた子育てサークルと子育て家庭をつなげつつ、活動運営サポートや立ち上げ支援を進めてきた。それから20数年が経過し、当初の子育てサークルの参加者は当然のことながら年齢を重ね、子ども達も成長した。その間、子育てや仕事だけではなく、地域住民の一人として、PTAや地縁活動、肩書はなくても何らかの意思や行動を通して次世代の子育ての手助けをする行動を自然な形で実践している人が増え、そうした変化から実践の成果を感じとってきた。京都子育てネットワークでは、この流れを「循環型の子育て相互支援」と呼び、

モデル化して提唱している。

子育てサークルの研究は、実態についての事例研究や母親の育児不安などが養育に及ぼす影響、母親同士のネットワークの広がり論じたものなど多数ある。母親同士のネットワークは、個々の家庭だけでなく地域・住民にも影響を及ぼしているのではないだろうか。その影響を可視化することはできないだろうか。筆者は、こうした問題意識をもとに一連の調査研究を進めている。その一環として、藤本（2018）の調査を基に作成した質問紙を用いて2018年に子育てサークルOBを対象とする質問紙調査を行った。本論文ではその質問紙調査の結果を基に、子育てサークルで出会った仲間とつながりを持ち、自発的な活動や相互支援の体験を積み重ねることが、10年・20年の年月を経て、地域の中でどのように成熟し、他者に影響を与える存在になっているかについて、図1の仮説モデルをもとに検討する。子育てサークル活動が地域のソーシャル・キャピタルに与えるインパクトを検証し、今後の場づくりについて論じる。

調査について説明する前に、理論的基盤である安梅（2007）のエンパワメントモデル（図1）と、それに基づいて筆者らが作成した仮説モデル（図2）について説明する。

2. 安梅（2009）のエンパワメントモデルと本研究の仮説モデル

藤本（2018）の質的調査では「ソーシャル・キャピタルを豊かにする仮説モデル」（図2）について検討した。子育てサークルOB（以下、サークルOBとする）10名に非構造化面接法によりインタビューを行い、逐語録を分類した。その結果、「不安」「情報」「居場所」「出会い」「共感」「ロールモデル」「役に立つ経験」「自己肯定感」「相互支援」の9つのコードを得た。さらにデータを分類したところ、「共感」「出会い」「自己肯定感」の категорияにおいて、それぞれ「仲間との共感」「仲間との出会い」「体験」というサブカテゴリーが特に抽出数が多いことがわかった（表1）。こうした結果をもとに、「仲間と出会って共感し合える関係性を持ち、何気ない会話や交流、体験を通して自己肯定感を高め、自分自身の力や使命に気づく流れが、当事者をより高い段階に発達させるために重要な意味を持っている」と考察した（藤本 2018）。

表1 子育てサークルにおける体験談で表出頻度の高いカテゴリー（藤本 2018）

カテゴリー	サブカテゴリー	抽出数
共感	仲間との共感	60
出会い	仲間との出会い	52
自己肯定感	体験	50

エンパワメントには、自分エンパワメント（self empowerment）、仲間エンパワメント（peer empowerment）、組織・地域エンパワメント（community empowerment）の3つの種類がある（安梅、

2009)。自分エンパワメントは、自分で自分の力を湧き出させることである。仲間エンパワメントは、仲間を使って力を引き出すことである。組織・地域エンパワメントは、組織や場、地域や仕組みなどを活用して元気にすることである。この3つを組み合わせることは、持続的で効果的なエンパワメントの実現に必須であるとして、エンパワメント相乗モデル(図1)と呼んでいる¹⁾。

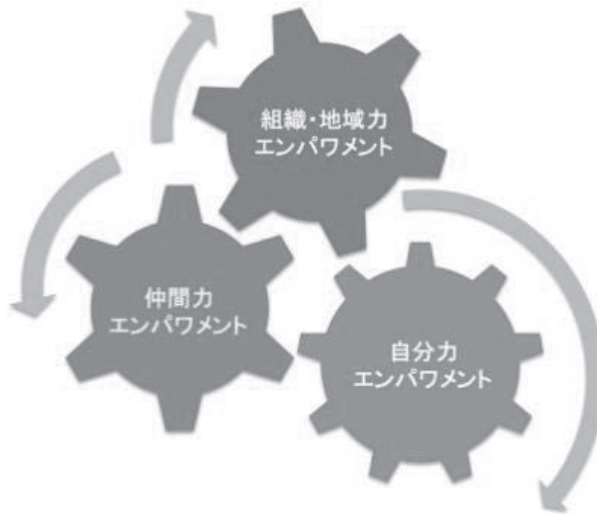


図1 エンパワメント相乗モデル(安梅²⁾)

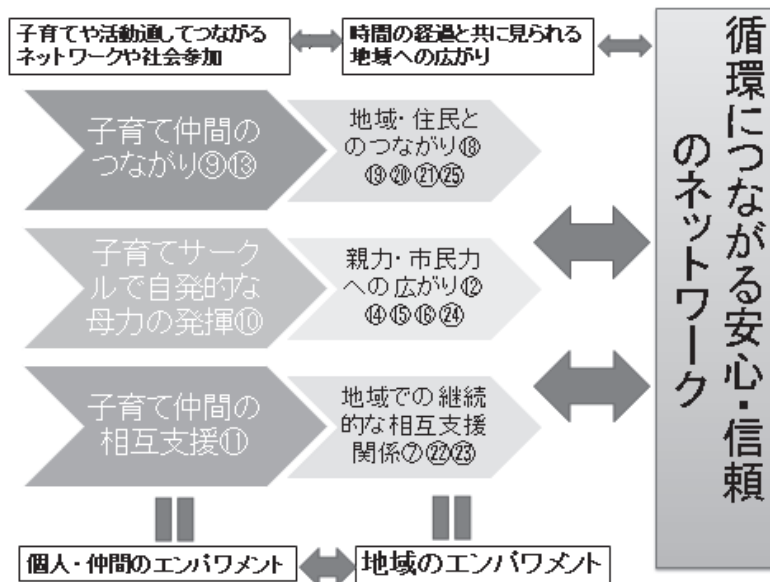


図2 ソーシャル・キャピタルを豊かにする仮説モデル(藤本2018) 図中に設問番号挿入

安梅（2013）によれば、エンパワメントが正しく機能するには「希望、夢」「自己効力感」「意味づけ」の3つの条件を満たしていることが必要である³⁾。

藤本（2018）は、全ての調査対象のインタビュー記録から、一人の母親が仲間と出会うことで、親としてサークルの一員として自分の役割を見出し、パワーを発揮し、地域の一員として周囲の子育てにも影響を与えていくといった、エンパワメント成熟のプロセスを確認している。どの事例も安梅（2013）のいう3つの条件を満たしており、エンパワメント事例と言えることが確認された。

そこで、このプロセスの積み重ねが循環を生み、安心して住むことができる地域に成長しているだろうと推測し、図2に示す仮説モデルを立てた。本論文では、藤本（2018）の調査結果をもとに、この仮説モデルの検証をさらに進める。

3. 調査方法

質問紙調査は、京都府内で子育てサークルを運営していた13団体の元リーダー14名の協力を得て、SNSにて子育てサークルOBメンバーに、google formを用いたアンケートをwebで拡散することを依頼して実施した。調査期間は2018年2月5日から2018年3月15日までであった、100名の子育てサークルOB（平均年齢42.6歳、SD=7.5439）から有効回答が得られた。

使用した質問紙は、藤本(2018)で実施したインタビューの結果と「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」（内閣府2002）などで使われた指標などを参考に、「社会的信頼」「社会ネットワーク」「互酬性の規範」の要素を含んだ25の設問（表2）とした。

表2 質問紙調査の設問

番号	設問内容	選択内容
①	あなたの性別は	女性・男性
②	あなたの年齢は	~20・21~25・26~30・31~35・36~40・41~45・46~50・51~55・56~60・60~（歳）
③	子育てサークルに通って医いた頃に住んでいた学区と今も同じ地域にお住まいですか。	はい・市内で引っ越しした・他府県へ引っ越しした・府内の別の市に引っ越しした・海外に引っ越しした
④	現在の居住地に住んで何年になりますか。	0~2・3~5・6~10・11~15・16~20・21~（年）
⑤	初めてサークルに参加された時期を選んでください。	2016~2013・2012~2008・2007~2003・2002~1999・1998~1995・1994~1990・1989~（年度）

⑥	子どもとサークルに参加された年数（空白期間があれば合計年数）	1未満・1・2・3 [~] 4・5 [~] 6・7 [~] 8・9 [~] （年）
⑦	子どもの同伴なしで、サークルやサロン・ファミリーサポート、放課後学び教室、NPOなどであなたが子育て支援活動に関わった年数を選んで下さい。有償無償、現在の関与の有無は問いません。	関与なし・1 [~] 2・3 [~] 4・5 [~] 9・10 [~] 14・15 [~] 19・20 [~] （年）
⑧	あなたの現在の職業を選んで下さい。	会社員・役員・自営業・公務員・専門職・パート・アルバイト・専業主婦・その他
⑨	あなたがサークルに入りたいと思った理由は何でしたか。該当するものすべてをチェックして下さい。	図3参照
⑩	サークル運営の関与の経験について1つ選んでください。	図11参照 ⑩⑭クロス集計：図12参照
⑪	あなたは、サークル活動を通して、様々な相談や支え合える仲間ができましたか。	5段階評定 図4参照
⑫	あなたにとって、サークル活動は自分自身を成長させてくれるものでしたか。	5段階評定
⑬	サークルで参加親子が成長するために大切だと思う事柄を3つ選んで下さい。	図6参照
⑭	色々な親子の多様な価値観を受け止めることができるようになってきたと思う。	5段階評定 ⑩⑭クロス集計：図12参照
⑮	困っている親子を見かけたら声をかけたいと思う。	5段階評定
⑯	自分の情報や行動が他の親子の役に立つことがあると思える。	5段階評定
⑰	サークル活動に関して印象に残っていることは何ですか。	自由記述
⑱	地区・学区・町内など地縁の役割についてお答えください。	5段階評定 図7参照
⑲	PTA 役員の活動状況についてお答え下さい。	5段階評定
⑳	市民活動・ボランティア（学生時代なども含む）についてお答え下さい。	5段階評定 図8参照

⑳	あなたが地域でつきあっている人の数を選んで下さい。	図 9 参照
㉑	あなたの地域の方との付き合いの程度を選んで下さい。	図 14 参照
㉒	近所の誰かが助けを必要としたときに、近所の人たちは手を差し伸べることをいとわないと思いますか。	5 段階評定
㉓	あなたの地域の人々は一般的に信用できると思いますか。	5 段階評定 図 13 参照
㉔	あなたにとって、自分と地域の人たちはつながりは強い方だと思いますか。	5 段階評定 図 10 参照

4. 質問紙の構成とソーシャル・キャピタルとの関連

1) パットナム (Robert David Putnam) の定義に基づく質問紙の構成

質問紙 (表 2) の理論的背景を説明する。

パットナム (1993) によれば、ソーシャル・キャピタルは「人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴」である。

ソーシャル・キャピタルの測定方法について、標準的な質問票として確立したものは現時点では見あたらないので、藤本 (2018) が実施したインタビューの結果に基づいて 25 の設問を作成した。それらをパットナム (1993) の定義を基に分類したものを表 3 に示す。質問紙はパットナムがソーシャル・キャピタルを定義した際の 3 つの要素を含んでおり、ソーシャル・キャピタルに関する調査となっている。この 3 つの要素はそれぞれ独立しているものではなく、ダイナミックな相互の関連があつて初めて成立し、深化・強化していくのであり、こうした分類は、ソーシャル・キャピタルの評価を可視化し、検討するうえで有効だと考える。

2) 設問の順序についての工夫

この質問紙調査は、ソーシャル・キャピタルに関する調査となっているだけでなく、本調査プロジェクトの土台となる「ソーシャル・キャピタルを豊かにする仮説モデル」(図 2) を検証しようとするものである。図 2 が示すように、この質問紙調査はそのモデルの要素の全てについて質問するものとなっている。ソーシャル・キャピタルと同じく、それぞれの事項は相互に関連しながら螺旋を描きつつ変化していくものであるため、どの項目に入れるのがふさわしいか判断基準が難しいが、できるだけ比較・検討しやすいように配置した。

表3 質問紙の構成

カテゴリー名† ¹	社会的信頼	社会ネットワーク	互酬性の規範
説明	一般的信頼	水平性（結束型・橋渡し型）・多様性	一般化された互酬性の規範（すぐにお互い様の関係にならないものも含む）
設問	⑭† ² いろいろな親子の多様な価値観を受け止めることができるようになってきたと思う。	⑪あなたは、サークル活動を通じて様々な相談や支え合える子育て仲間ができましたか	⑫あなたにとってサークル活動は自分自身を成長させてくれるものか
	⑮あなたは、地域の人々を一般的に信用できると思いますか。	⑬地域・学区・町内等地縁の役割についてお答えください。	⑬困っている親子を見かけたら自分から声をかけたいと思う。
		⑭PTA 役員の活動状況についてお答えください。	⑭自分の情報や行動が、他の親子の役に立つことがあると思える。
		⑮市民活動・ボランティア（学生時代なども含む）についてお答えください。	⑮近所の誰かが助けを必要としたときに、近所の人たちは手を差し伸べることをいとわないと思いますか。
		⑯あなたが地域で付き合いしている人の数を選んでください。	⑯あなたにとって、自分と地域の人たちはつながりが強いほうだと思いますか。
		⑰あなたの地域の方との付き合いの程度を選んでください。	

†¹ パットナム（2013）の定義に基づいてつけた分類カテゴリーの名称

†² 表2に示す質問紙の設問番号

5. 結果・考察

本論文では、調査結果の一部を取り上げ、それを基に、「ソーシャル・キャピタルを豊かにする仮説モデル」(図2)が有効か、図2に示した段階毎に検証していくことにする。

5-1 「子育て仲間のつながり」から「地域・住民とのつながり」への広がり

(1) 第1段階「子育て仲間のつながり」について

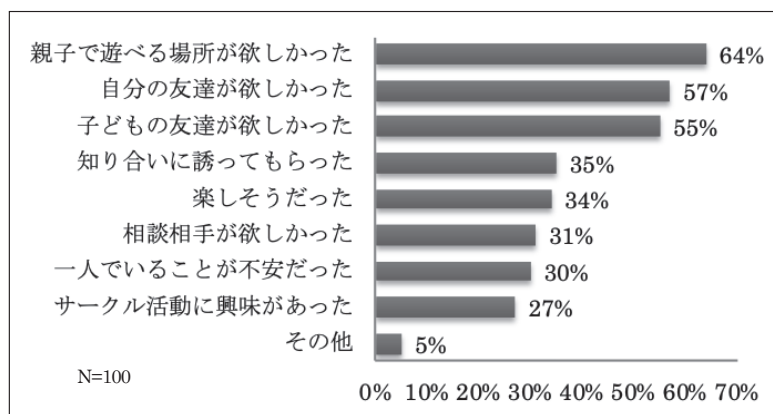


図3 子育てサークルに入った理由

子育てサークルを卒会してから1~20年以上経つメンバーに、入会時を思い出しながら選択肢から当てはまる入会理由を選んでもらった(図3:設問⑨)。複数回答であり、のべ339件の回答が得られた。一人平均3個選択しており、「親子で遊べる場所が欲しかった」(64%)、「自分の友達が欲しかった」(57%)、「子どもの友達が欲しかった」(55%)が上位3位を占める。設問⑩で「リーダー、リーダーの補佐的な役割を担ったことがある」と回答した積極的なメンバーでも、サークルに所属するまでは地域の中で親子の居場所や仲間とのつながりを求めている者が少なくない。

「サークル活動を通して様々な相談や支え合える子育て仲間ができたか」(図4:設問⑪)について、ほとんどの回答者が「全くそう思う」(51%)か「まあできた」(32%)と回答しており、サークル活動をすることで当初のニーズを満たせたと実感していることがわかる。

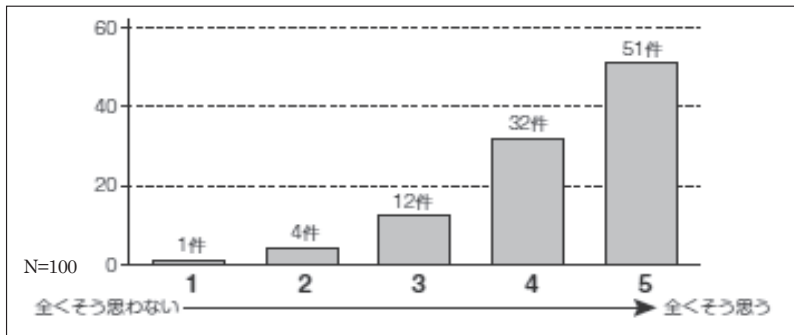


図4 サークル活動を通して様々な相談や支え合える子育て仲間ができたか

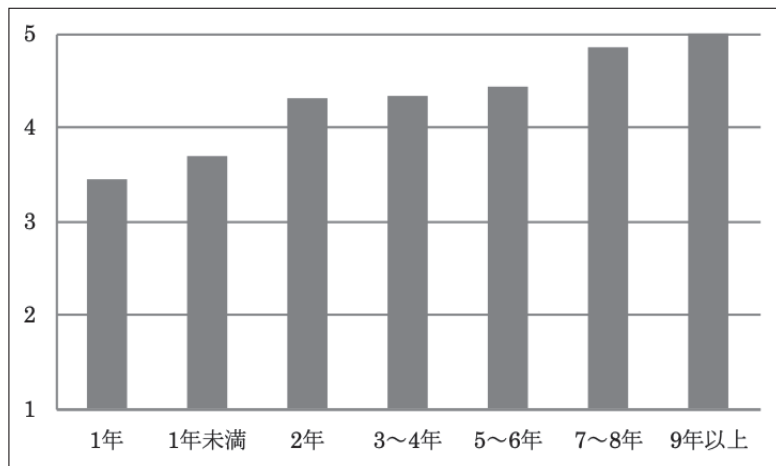


図5 仲間ができる度合いの変化（経験年数別項目得点平均）

支え合える仲間ができる度合いと活動年数のかかわりを調べるためにクロス集計したところ、図5に示す結果となった。活動年数が9年以上と長く経験している人は全員が「全くその通り」と回答し、2年以上でも平均が「まあその通り」以上である。一方、1年もしくはそれ以下の者は平均が「どちらともいえない」と「まあその通り」の間である。これらから、活動年数にともない仲間づくりの度合いが高くなる傾向があることが示唆される。

サークルで親子が成長するために特に大切だと思う事柄を3つ選んでもらったところ（図6：設問⑬）、80%が「共感し合える仲間がいる場である」、70%近くが温かく親子を迎え入れてくれる場であることを選んでいた。

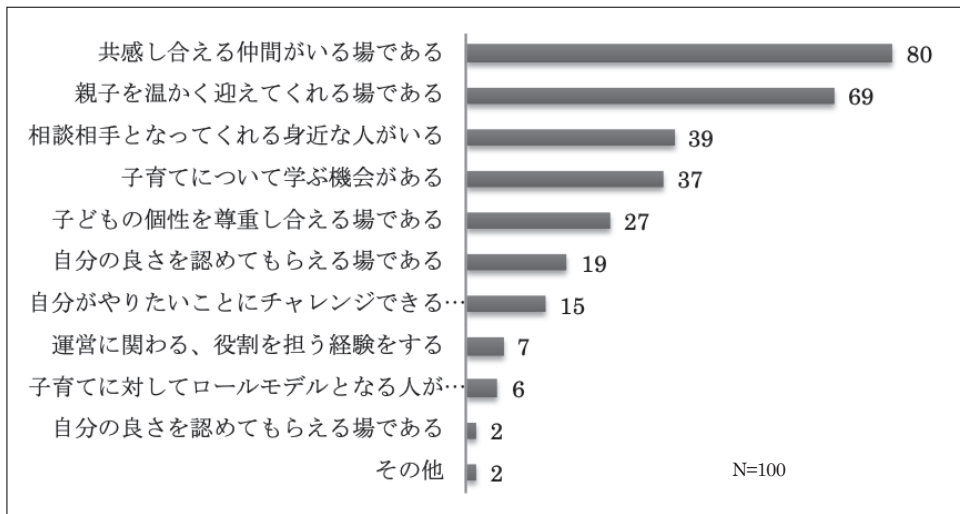


図6 子育てサークルで参加親子が成長するために大切だと思うこと

以上、図2の仮説モデルが示すように、「子育て仲間のつながり」が親子のあそび場や仲間が欲しいというニーズから始まり、活動を毎年続けるうちに支え合える仲間ができていくことがわかった。また、サークルOBの多くが、子育てサークルで親子が成長する自分エンパワメントには、仲間の存在、つまり仲間エンパワメントが大切だと考えていると言える。

(2) 第2段階「地域・住民とのつながり」について

次に、上述した子育て仲間との関係性を深めてきたメンバーが卒会して地域の中でどのようなことに関心を示して行動しているのかを見る。「地域・学区・町内など地縁の役割」(図7:設問⑱)について、「積極的に関わった(5)」～「担ったことがない(1)」の5段階で評定してもらったところ、サークルOBは47%が「積極的に関わった」と回答している。「国民生活選好度調査」(内閣府・2006)は設問が少し異なるが、町内会・自治会に積極的に関わっていると答えるのは月1回以上は12.6%であり、それと比較してみると34.4ポイントも上回っている。この違いは、子育てサークルに参加する母親は、地域活動に関与する意識が一般の人々より強くなることを示唆していると考えられる。

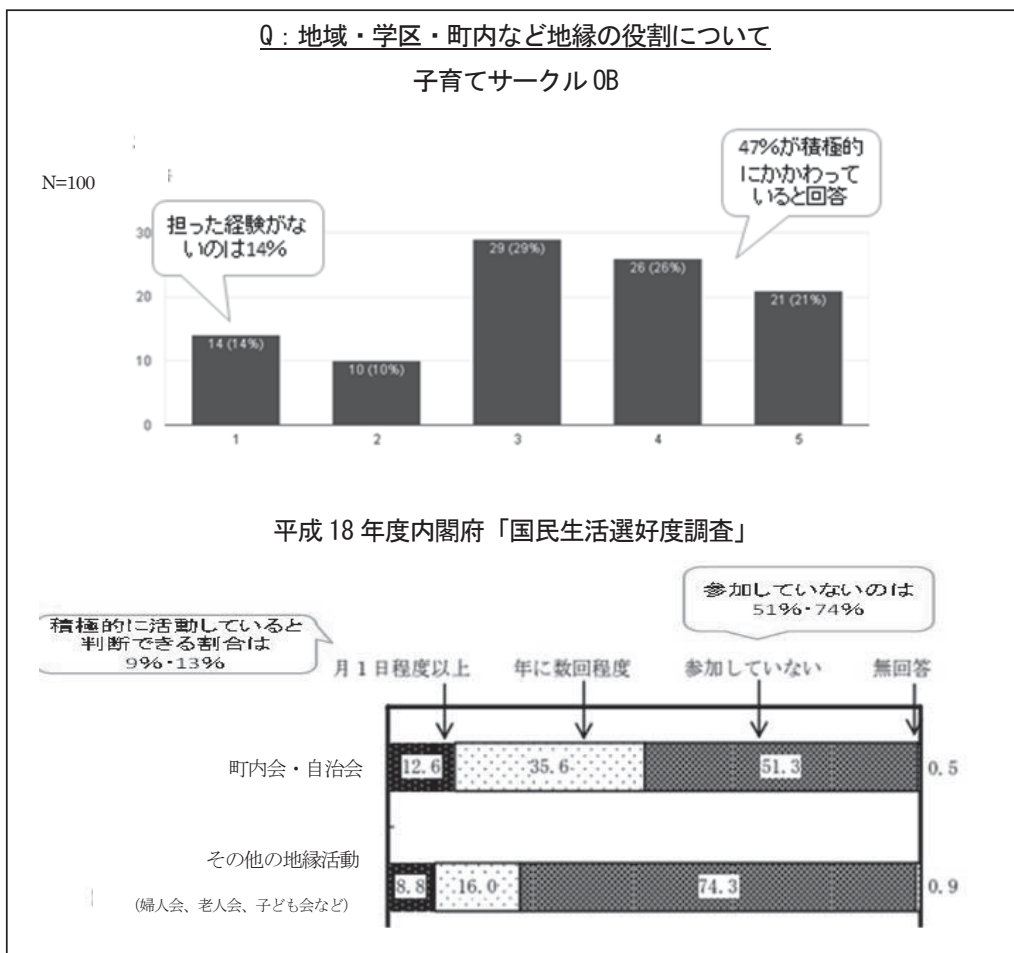


図7 サークルOBと一般対象の「社会ネットワーク」(結束型SC)に関わる行動の違い

同じく、「市民活動・ボランティアについて」(図8：設問⑳)を比較してみると、本調査では34%が積極的にかかわった経験をもつのに対し、内閣府(2006)では7.2%であり、本調査が26.8ポイント上回っている。

「近隣の交流」に関する設問(図9：設問㉑)で「近所のかかなりの多く(概ね20人以上)の人と面識・交流がある」と回答したのは32%である。同じ内容を質問している「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」(内閣府・2002)では9.9%であり、今回の調査結果と22.1ポイントの差がある。

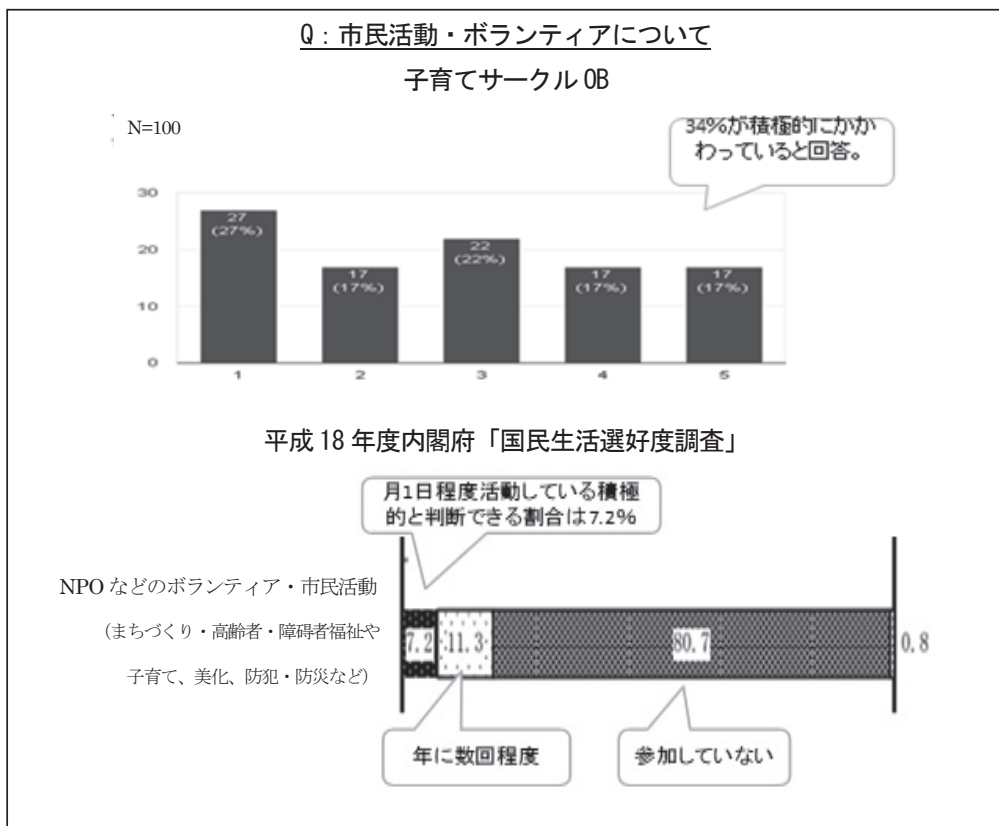


図 8 サークルOBと一般対象の「社会ネットワーク」(橋渡し型SC)への関与の違い

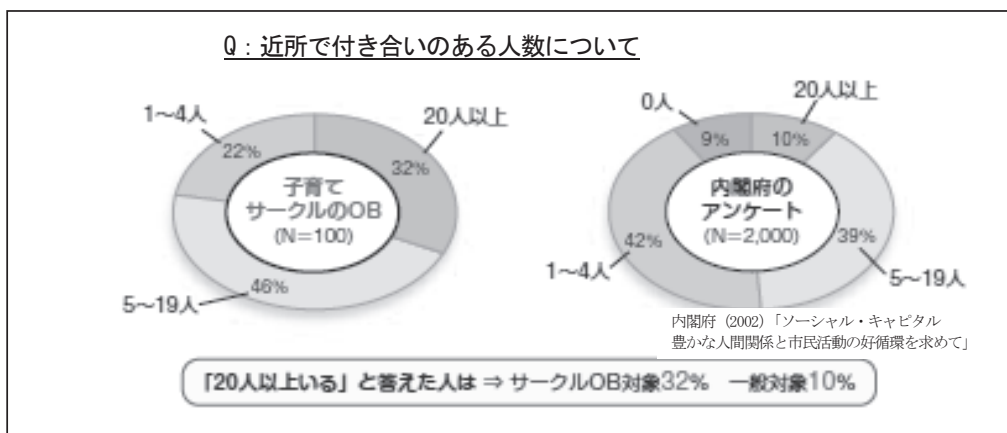


図 9 サークルOBと一般対象の「近隣との交流」(結束型SC)の度合いの違い⁴⁾

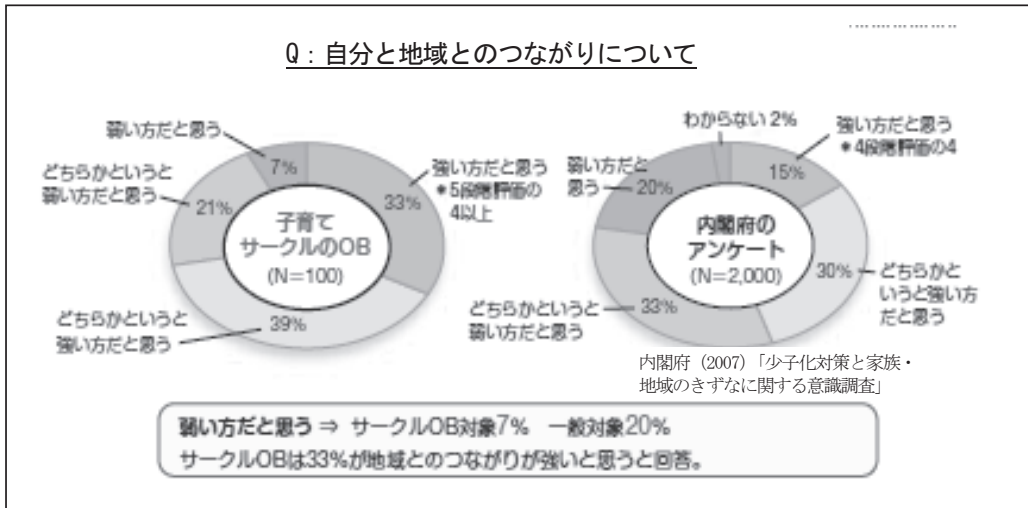


図10 サークルOBと一般対象の「互酬性の規範」の意識の違い

さらに、「あなたにとって、自分と地域の人たちのつながりは強いほうだと思うか」（図10：㉔）の設問でサークルOBは5段階中「5」か「4」を選んだのは33%であるのに対し、「少子化対策と家族・地域のきずなに関する意識調査」（内閣府・2007）で「強い方だと思う」を選んだのは15.3%である。評定尺度が同じでないため比較は難しいが、本調査において、「1」か「2」を選んだのは28%であるのに対して、内閣府調査で「弱い方だと思う」「どちらかといえば弱い方だと思う」が45.5%であり、17.5ポイントの差より本調査対象者の意識が高いと言える。

これらの結果を総合的に判断すると、本調査の対象者は、自分がよくされたら誰かによくしてあげようといった互酬性の規範が高いのかもしれない。

近年、住民へのソーシャル・キャピタル調査等で測定すべき項目の中で、認知的ソーシャル・キャピタル（感じ方や考え方）として、信頼や助け合いの規範などが挙げられている。また、構造的ソーシャル・キャピタル（目に見える行動）として、近隣との交流などの結束型ソーシャル・キャピタルに関する質問や、ネットワーク、社会参加などの橋渡し型ソーシャル・キャピタルを測定するための質問例が使われている。

以上の比較から、子育てサークルにおいて、自分・仲間エンパワメントをしながら、地域へのエンパワメントへと成長を果たすことを読み取ることができる。さらに、国民調査と比較したところ、いずれもサークルOB100名の地域とのかかわりは、意識・行動共に一般市民よりも高く、安心・信頼のネットワークを作る役割を果たしていると言える。

以上の結果より、図2の仮設モデルにあげている、「子育て仲間のつながり」が「地域・住民とのつながり」へとネットワークや信頼関係が広がり深まりをみせていることが検証できたと考える。

5-2 「子育てサークルでの自発的な母力の発揮」から「親力・市民力への広がり」へ

(1) 第3段階「子育てサークルでの自発的な母力の発揮」について

子育てに専念している期間は、地域・社会とのつながりから分断されがちになり、自分の力を家庭以外で発揮する機会が閉ざされる。ところが、子育てサークルという場所そのものが、みんなで運営していくというスタンスを取る場所であることから、自然と母力を発揮せざるを得ない。京都子育てネットワークでは、この仕組みこそが循環型の子育て支援を支える要になると考えている。今回の調査では、回答者の83%は何らかの形で関与しており、特に45%は非常に意欲的に取り組んでいることがわかった（図11：設問⑩）。

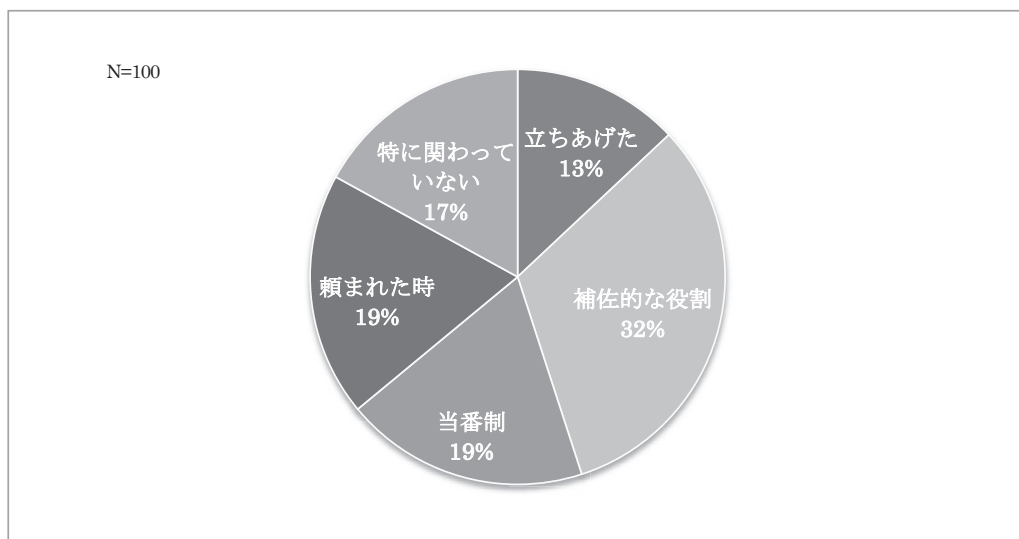


図11 サークル運営に関与した経験の有無（設問⑩）

(2) 第4段階「親力・市民力」への広がり

「サークル運営の関与の度合い」によって認知的ソーシャル・キャピタルに影響があるのかを確認するためにクロス集計を行った。「自分で立ち上げ経験」をもつ層は、全てに関して5段階評価の優位の位置を占めていた（図12）。以降、関与度合いが低い方向で数値が下がっていく特徴をもっていた。つまり、母力発揮の一つの行動の現れである「サークル運営の度合い」は認知的ソーシャル・キャピタルに影響をもつと言える結果となった。

さらに、「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」（内閣府・2002）の調査（図13）では、「あなたは地域の人々を一般的に信用できると思いますか」の問いで、「出来る」と回答したのは34.1%であるのに対し、サークルOBの調査では（図13：設問⑭）60%である。比較したところ、25.9ポイントも高いことがわかった。何の影響でこのような結果になっているのかは今後、さらに調査する必要がある。

以上、図2の仮設モデルの「子育てサークルで自発的な母力の発揮」が「親力・市民力へのひろがり」へと拡大し、地域の信頼関係をうむ原動力となっていることが検証されたと言えるだろう。

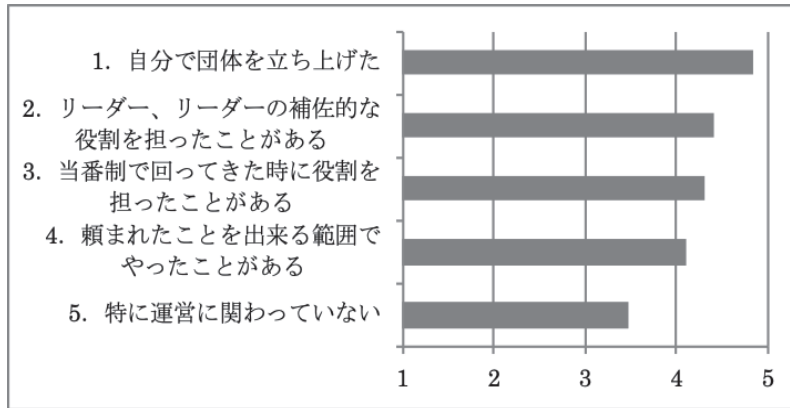


図12 サークル運営に関与した経験の度合い（設問⑩）と多様な親子の価値観を受け止めることができると思う度合い（設問⑭, 項目得点平均）との関係のクロス集計

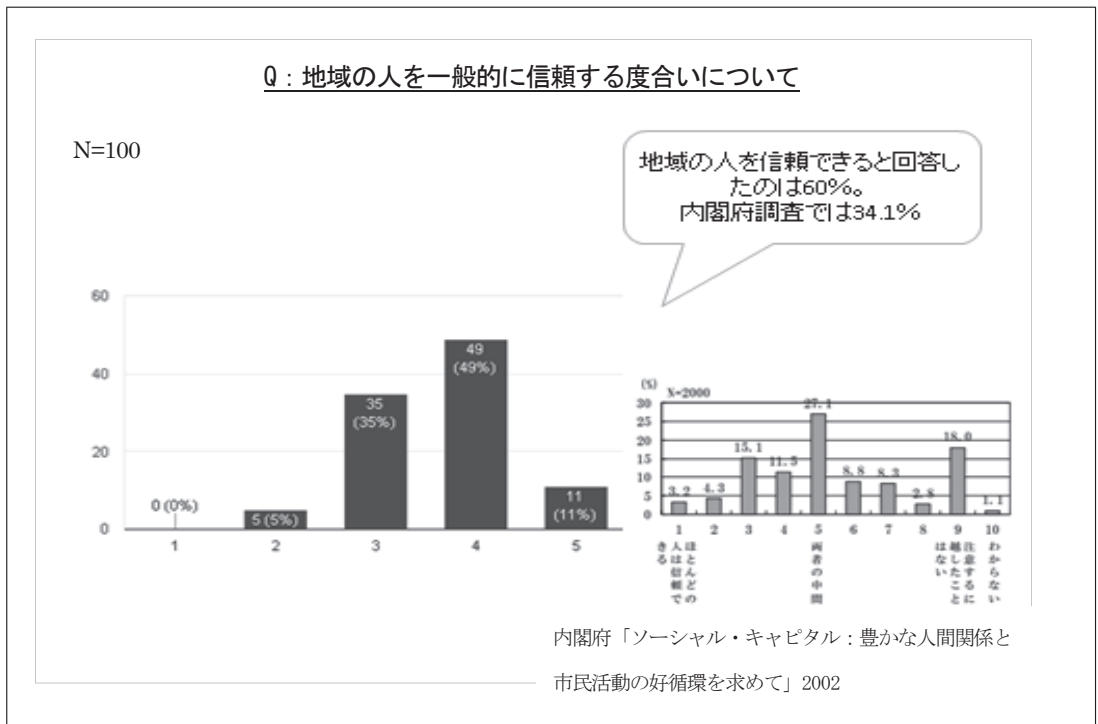


図13 サークルOBと国民全体の「地域の人を信用できる」意識の違い

5-3 「子育て仲間の相互支援」から「地域での継続的な相互支援関係」への広がり

(1) 第5段階「子育て仲間の相互支援」について

図4（設問⑩）の結果によると、支え合える子育て仲間ができたと回答するのは83%を占めている。この結果から、子育てサークル活動を通じて「子育て仲間の相互支援」の関係性が構築されていると言えるだろう。

(2) 地域での継続的な相互支援の関係

「あなたの地域の方との付き合いの程度を選んで下さい」（図14：設問⑫）の設問で、「生活面で協力し合っている」と回答したのは、本調査では30%であるのに対して、内閣府調査では10.7%である。「挨拶程度のつきあい」「全くしていない」を選んだ割合は本調査が15%であるのに対して内閣府調査は55.9%と、その差が40.9ポイントある。ここから、サークル経験者の住む地域は近隣の交流が活発であり、継続的な相互支援関係を築いていることが示唆される。

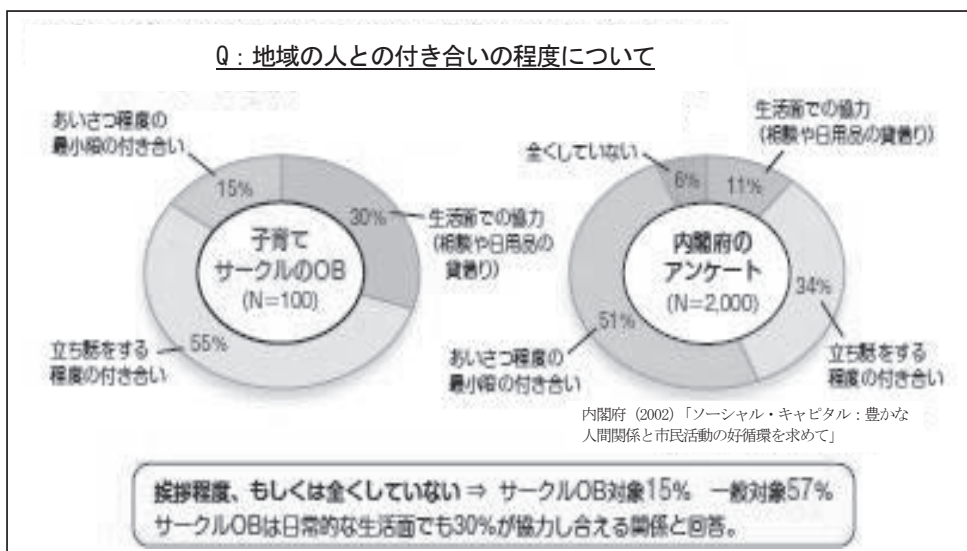


図14 サークルOBと一般の「近隣との交流（結束型SC）」の程度の違い

さらに、継続性を確認するために、子育てサークルを卒業（子どもの入園などで）した後、子育てに関わる活動年数を質問したところ、54%が地域の子育てのために活動していることがわかった（設問⑦）。従って、「子育て仲間の相互支援」の経験の蓄積が、「地域での継続的な相互支援の関係」を紡いでいく力となっていることが検証されたとと言えるだろう。

6. 討議—子育てサークルは地域のソーシャル・キャピタルを豊かにするのか—

対象者の枠組みをサークル OB に限定した本調査を、これまで一般的に調査されていたソーシャル・キャピタル測定調査の代表といえる内閣府調査と比較したところ、社会的信頼、社会ネットワーク、互酬性の規範のいずれにおいても後者より優れた結果が得られた。また、「ソーシャル・キャピタルを豊かにする仮説モデル」(図1)を裏付ける結果が得られた。従って、子育てサークルに参加して長年活動をすることで、個人的なエンパワメントだけでなく、そこから集団や地域のエンパワメントにつながっていくこと、すなわち、子育てサークル活動が地域のソーシャル・キャピタルを豊かにすることを、ある程度検証できたのではないかと考える。

藤本(2018)では、インタビューにより、子育てサークルを経験した母親達がPTAや地域活動の中心となって活躍した事例や、母親に連れられて子育てサークルに参加して他の子ども達と遊んで成長した子どもが、大人になって社会活動に積極的に参加する事例が確認されている。

無論、サークルでの経験やつながり以外の様々な要因も大きく影響していることが考えられる。しかし、少なくとも今回の質問紙調査の結果を分析することにより、子育てサークルが循環につながる安心・信頼のネットワークを地域に作る起爆剤として、地域になくってはならない影響力をもつことを確かめることができたのではないかと考える。

筆者が現場経験を通して感じるところでは、近年、子育てサークルにおける活動年数が短くなる傾向がある。その背景として、女性の自己実現、育児休暇制度の整備や再就職支援の後押し、さらに、共働きでないと家計が立ち行かない社会情勢の変化があると考えられる。また、保育所整備が進んだことも関係があるだろう。多くの参加者は1年未満で卒会していくのが現状である。子育て仲間が支え合える関係性を作る条件の一つが成立しなくなっているのかもしれない。しかしながら、調査結果から子育てサークルへのニーズは失われておらず、これまでと同じやり方では通用しなくなっているとしても、揺るぎのないニーズにどのように応えていくかは、これまで同様、あるいはそれ以上に喫緊の課題となっていると考える。

今回の調査結果はすでにハンドブックとして関係者に知らせているが、こうした知見が今もなお多様な立場で活動しているメンバーや、現在、地域住民としてつながりを広げながら生活しているメンバーの大きな「希望」や「自己効力感」となり、「意味付け」を強化するものとなることを確認している。こうした普及・啓蒙活動をさらに推進して、こうした知見を多くの人々と共有して子育て支援活動の活性化に役立てていきたい。

2002年に国庫補助事業「つどいの広場事業」が始まり、2008年には児童福祉法等の一部を改正する法律により、地域子育て支援拠点事業が第二種社会福祉事業として位置づけられた。地域の実情に差はあるが、この事業の進展により自主的な子育てサークルを継続する意味が失われ、徐々に衰退している傾向にある。今後の課題として、誰一人取り残さない社会をつくるためにも、さらに10年先を見据え、安心・信頼のネットワークを広げる市民づくりを視野に入れた子育て支援の場の在り方を模索することが必要だと考える。

謝辞

この調査の実施及びデータ分析については、特定非営利活動法人京都子育てネットワーク平成29年京都府こどもつながり応援隊事業補助金活用事業を活用し、神戸大学大学教育推進機構米谷淳教授から多大な協力を頂きました。ここに感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 高山忠雄監修 安梅勅江・芳香会福祉研究所編著 (2014) 「いのちの輝きに寄り添うエンパワメント科学—だれもが主人公 新しい共生のかたち—」北大路書房 p7
- 2) 子育て子育てエンパワメントに向けた発達コホート研究
<http://plaza.umin.ac.jp/~empower/ece/whatisem/#top> (最終検索日:2020年2月15日)
- 3) 高山忠雄監修 安梅勅江・芳香会福祉研究所編著 (2014) 前掲書 p8
- 4) 藤本明美 (2019) 「ファシリテーション実践ハンドブック つながりづくりのためのアイデア集」特定非営利活動法人京都子育てネットワーク 平成30年京都府こどもつながり応援隊事業補助金活用事業 図3・4・6・9・10・14を引用

参考文献

- こころの子育てインターねっと関西 (2001) 「あなたのまちの子育てサークル」
- 原田正文 (2002) 「子育て支援とNPO—親を運転席に！支援者は助手席に！」—朱鷺書房
- 藤本明美 (2003) 「子育てサークル共同のチカラ」文理閣
- 藤本明美 (2018) 「子育てサークルは地域を活性化するか—面接調査をもとに—」京都聖母女学院短期大学研究紀要第47集 pp. 72-84
- 安梅勅江 (2007) 健康長寿エンパワメント—介護予防とヘルスプロモーション技法の活用— 医歯薬出版
- 安梅勅江 (2013) 「エンパワメント科学入門—人と社会を元気にする仕組みづくり—」エンパワメント科学研究会
- 安梅勅江 (2017) エンパワメント科学：だれもが主人公 新しい共生のかたち 認知神経科学 Vol. 19
- 稲葉陽二 (2011) 「ソーシャル・キャピタル入門—孤立から絆へ—」中央新書
- 内閣府 (2006) 「国民生活選好度調査」
- 内閣府 (2007) 「少子化対策と家族・地域のきずなに関する意識調査」
- 内閣府 (2002) 「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」
- 地域保健対策におけるソーシャル・キャピタルの活用の方に関する研究班 (2017) 「住民組織活動を通じたソーシャル・キャピタル醸成・活用にかかる手引き」平成26年度厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業
- 神原理 (2011) 「ソーシャル・キャピタルの質的調査法」社会関係資本研究論集第2号